



續羣書一覽

五

4加2  
765  
5





門 4 2  
第  
卷

人 傳 之 部  
系 譜 之 部  
補 任 之 部

內閣  
高橋

續群書一覽

辰

五

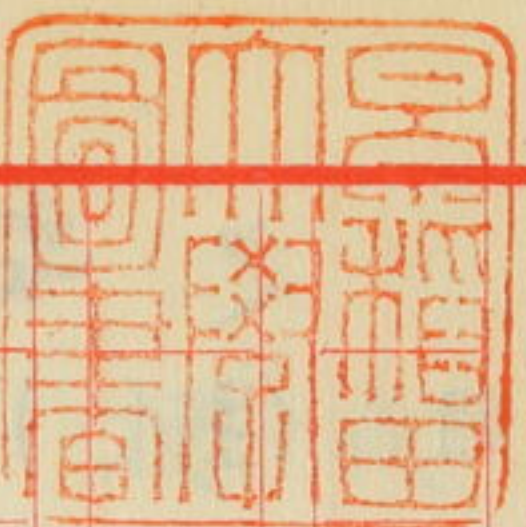


人傳之部

一清磨公傳記

寫

全



林道春 撰

贈正三位行民部卿兼中宮大夫美作備前國造和氣朝臣清磨公則護王大明神之御傳記也奧書仁曰

和氣清磨傳載在國史令也大醫半井驢庵以為其芳裔故屢被求之其不忘出自誠可嘉焉因抄寫其傳以寄文



寛永丁丑孟夏二日 民部卿法印道春

一 弘法大師行状要集 寫 六 冊

權少僧都賢宝 撰

此書卷之一ハ桓武天皇御代卷之二平城天皇嵯峨天皇御代卷之三嵯峨天皇御代卷之四淳和天皇御代卷之五仁明天皇御代卷之五大師入定以後と區別をたて、其一世之行状及び法驗等を委しく記す蓋し撰者賢宝ハ東寺觀智院第二世之任侶其比有名なる智識也奥書に曰  
自應安七年正月下旬令起筆草至同三月廿一日

(第壹紙)

夜檢籍朝夕執翰全部終篇章管見所及只甄録  
搜概不逞盡枝流是令勒大師之行化將擬鴻恩  
之報酬而已

金剛乘賢宝

四十二

此原本今に東寺に傳來して世上流布本と相違  
殊に衆一以て校合せの其補益少なるを

一 大師御入定行儀 寫 一 帖

此書ハ別尊要記東宝記本朝神仙傳等より抄出  
弘法大師入定の式及び其後觀賢傳正剃髮之



次第真如親王大師の御影を圖し給ひし事杯を  
荒増に記す

於月輪寺以先師本写之以彼本書写之即一校  
了玄海

一聖 宝 傳 日 一 卷

此書卷首に云兼平七年九月十一日左近衛將監紀

人宣旨に依り其傳を略記したる由を記す聖

宝傳正ハ紹運録に友皇子之孫葛野王之次男

池邊王の弟とす此傳記に八田原天皇弟春日皇

子五世恒蔭王聖宝初名父者葛蔭王とす天長九年誕

(第壹説)

兼和十年六月真雅の門に入るとあり兼文按に

大友皇子壬申之乱崩御より聖宝尊師天長九年

誕生まで一百六十一年間にして葛野一代なる

ハ紹運録の粗漏も又甚しき誤り也然而田原天

皇之弟に春日皇子を記載せす一代要記に田原

天皇天智帝才御子春日皇子其子安貴王其子市原

王とあれハ聖宝僧正也此流支なるべし則山城

國宇治郡笠取山醍醐寺の開基にて理源大師と

謚號せられし有暎之高僧也奥書に曰

安元二年三月四日書寫之 前威儀師慶延本



一慈覺大師傳

寫

一卷

慈覺大師諱円仁俗姓壬生氏下野國都賀郡之人也延曆十三年誕生九才仁一鑑真和尚三代大慈寺廣智之弟子十成大同三年十登叡山兼和五年六月入唐同十四年九月歸朝嘉祥元年春奉詔入京參叡山同年六月廿七日授大法師位元慶六年正月十四日遷化七十二同八年七月十四日号慈覺大師贈了了此一世之記事明白也奥書曰貞和五年中夏上旬之比一覽畢此記抄主誰人乎可尋記之但部率上網灌頂見聞集仁引大師

(第壹號)

傳被常濟阿闍梨手印灌頂事即此傳文也又故

菴院二品大王覺雲令撰集雖妄二十余間坐彼

第二間仁令略抄大師傳給是又此傳也既上古

先哲六代明匠被依用之作可信之莫貽疑了

求法沙門經嚴記之行十九

此一卷東寺觀智院傳來之古寫仁一仁流布本仁

相違衆仁

一入唐五家傳

寫

一卷

此書入唐五家仁安祥寺僧都惠運禪林寺僧正宗  
 叡小栗栖律師常曉真如親王靈嚴寺阿闍梨仁行



等之真言五僧求法之為渡海也歸朝之節將來可  
依此之經卷佛像等之目錄にして其傳記ハ大概  
を録し將來品を詳にしたる書也

一高藤公傳 一冊

此編ハ大職冠鎌足公六代右大臣内膳公之六男  
内舍人良門の子内大臣高藤公若かりし時栗栖  
野之大領通なる宮道弥益之女と契り其役けり  
れし女君の宇多院へ入内ありて延喜帝と皇大  
后宮胤子といてき給ひて帝祖になり榮へ給ふ  
事公之子孫朝家之要臣たへ給はさる事又宮道

(第壹説)

氏之山科之宅地を寺となし觀修寺を建立あり  
一事なとを記す奥書に曰

右一冊以頭右中采宣治朝臣本行時之間馳禿  
筆訖不審多之重以他本可校合者也

天文十年八月廿三日 黄門侍郎藤和房

一真言傳 七冊

慈尊院榮海 撰

正中二年六月晦日撰者之跋あり

此編に載る真言之高僧ハ卷之一龍猛無龍智弁  
大弘教三藏善無畏三藏大辨正三藏一行禪師惠

古書保字會



果和上卷之二清年論師南天竺皇子隨求陀羅尼  
事尊勝陀羅尼事仁王經事千手陀羅尼事宝篋印  
經事卷之三傳教大師弘法大師慈覺大師智證大  
師幸曉律師円行和尚惠運僧都宗獻僧正卷之四  
役優婆塞泰澄和尚内供奉光定僧正真濟僧正真  
雅權僧正慈泚茨田貞益行信禪師常行大將九条  
右大臣清和天皇僧正遍昭阿闍梨湛慶僧正益信  
行教和尚僧正聖宝相應和尚峯延法師僧正觀賢  
僧正靜觀卷之五月贈僧正尊意至大僧正深覺七  
六人卷之六月大僧正惠<sup>慶</sup>円至權僧正範俊此三人

(第壹號)

卷之七月增譽大僧都至越前國男三十七人也  
本編八碑文本傳行狀日記物語等之抄本大旨久  
安仁平以前之事を多く載す是弘法盛之時也明  
惠高年上人之如きハ雖近世高德靈異揭然たり  
と<sup>り</sup>以て記載あり  
一弘法大師行化記  
馬  
二  
卷  
行遍僧正撰  
此書ハ大師御一世之行化之大概を録す了すて  
これと古書に<sup>り</sup>て他本之大師傳記之類ハに安  
らす其跋に云



建仁元年四月廿日於高野山行遍記之

一祖師略傳 一冊

此編ハ真言宗之祖師略傳トシテ撰者知ラテ序

跋ナシ其載了処ハ一行惠果弘法實惠真雅真湊

真然真紹紹宗叡源仁益信聖宝觀賢淳祐元果仁海

成尊範俊嚴覺増俊顯嚴親嚴以上廿二僧也

一本朝神仙傳 一冊

此編ニ神仙ト稱小傳を奉了処の人名ハ倭武

命上宮太子武内宿祢浦島子役行者德一大德秦

澄大徳久米仙都藍尼善仲善算窺詮法師行叡居

(第壹號)

士教侍和尚報恩大師弘法大師慈覺大師陽勝仙

人同弟子仙河原院大臣侍藤太君源太君賣白箸

翁都良名河内國樹木僧美濃國河邊人出羽國石

窟仙大嶺僧同山仙竿打仙伊予國長生翁中算上

人童橋正道東寺僧比良山僧愛宕僧沙門日藏以

上卅七人也

一續日本往來生傳 一冊

此編全部四十二人之内卷端虫損十二人之姓名

及往生傳を欠く然レ古寫ニシテ他本を見テ補

了了事の能ハ了了ハ殊に惜むレ一今傳了了処

古書保存會



〇人名小樵少僧都覺超樵大僧都桓舞砂門增加  
 同仁賀同寬印真緣上人阿闍梨理光同範久同成  
 尊砂門良範同能月同高明因安修同助慶阿闍梨  
 覺真同延慶砂門覺尊同賢救同日月慶保胤大江  
 為基同定基同奉周但馬守源章任前伊与守賴義  
 散位小擬兼任參議藤原兼經卿比丘尼願西同緣  
 妙蔭子等合此人跋仁曰  
 建保第七載三長才一月中旬牙  
 方丈草庵寫之了此則為自勵忠志令他發信心  
 唯願此傳紹緣人各留半座兼花蒸待我闍浮紹

緣人願以功德臨欲命終時必得弥陀迎往生安  
 樂國  
 砂門慶政記

書本文字極惡以他本可校者之  
 一俊 苜 國 師 傳 寫 一 冊

俊苜國師八字不可棄肥後國飯田郡之人藤原氏  
 也十八才仁下薙髮十九才太宰府觀世音寺仁下  
 受戒之上入京建久十年四月求法之為采國仁航  
 一建略元年歸朝佛舍利三粒律宗經書三百七  
 卷天台章疏七百十六卷華嚴章疏百七十五卷儒  
 書二百五十六卷雜書四百六十卷九二千一百三



卷其餘圖書碑帖器物甚多、同年四月洛東建仁寺に到り、同二年筑紫崇福寺に移り、貞應三年十月鎌倉に入り、嘉祿元年十月東山泉涌寺を建立中興す、後鳥羽上皇菩薩戒を奉授、同三年壬三月七日壬辰年六十二一世中之奇瑞多く、且練学之次第を詳かに記載す

一三 忠傳

寫

二 冊

苜庵安東字約撰

天和三年亥六月自序、兵門生默庵、所岡宗純、次序苜庵、適子侗庵、元簡、後叙、委漢字本編、再回

(第壹號)

三忠者、小松内大臣重盛、公万里小路中納言藤房卿贈三位中将楠正成卿也、然而正成卿之條下に世子正行朝臣之事蹟を附記す、藤房卿之傳并贊ハ慶長九年之冬、林羅山廿二歳之奮撰也、正成卿正行朝之贊ハ朱舜水并守約別贊す、叙事精亮贊辞簡潔、議論正確之書なり

一 足利將軍傳

一 冊

佐々宗淳子朴撰

卷端引用書目九十四部を挙げ、此傳足利義持將軍より義量、義教、義勝、義政、義尚、義植、義澄、義晴、義

行書保字留



輝義榮義昭以上十二代之傳記に、義持義教  
義政義植義晴義榮義昭等、各贊詞あり、著者宗  
淳、元京師之人、妙心寺の僧と爲り、後佛道看破  
俗に歸し、水戸義公に奉仕す、彰考館編修事を  
総載す、元禄五年六月、摂州湊川に楠公之碑を建  
たりし、則此人なり。

一本朝儒宗傳

三冊

後五位下大和守正純撰

元禄庚午六月、巨子映序、次引用書七十八部を奉  
く

此編に載了、処天皇十六王、来朝師儒九人、大臣廿  
七人、王子九人、姫嬪七人、庶姓八十六人、にて其  
傳に盡さざり、又清少納言紫式部赤染衛  
門等有才譽、今不取、何也、彼媼婦而其言驕且醜、其  
情乱且賤、婦女之長舌利口、覆邦家、牝雞之晨、誤千  
歳之男子、狐惑者三女也、云々論に過たると云可

一盛姫一代記

寫

二冊

盛姫、美濃國土伎之一族、要人某之女、にて  
明智光秀の養女也、鈕鎗馬術に長し、歌連歌に達  
し、讀書をよくす、殊に容貌美麗なり、か、秀滅



亡之後豊公を仇讐せし志を遂す土州へ下り  
長曾我部へ身を依頼して居りし後退去を命  
せられ一旦故郷へ帰りし乳母の兄弟悪心あ  
りて居た、まれす三州峯の薬師へ詣て依田村  
に自殺せむとす際設樂四郎左衛門に取留め  
られ遂に徳川家康公之恵を得て井伊直孝へ預  
けられ折々召出されしか慶長四年三十二才に  
て病死す一生之記なり

一徳川將軍家外戚傳

写

二冊

此書は岡崎城之由來神君外祖母之由緒精木大河

宮内同母堂久松氏之家系神君男女公達母公之傳

鶴殿青山塚花井清水家光公御臺中之丸松平信清

系麗女於万方戸田家綱公母堂増山綱吉公母堂

本庄會津正之母堂公甲府綱重公母公家光公息女

千代姫母公家光公乳母春日局由緒藤葉明智綱

吉公御子鶴姫徳松之母堂小屋綱吉公養女竹姫

之事同麗女右弟つ佐局之事桃井家宣公母堂兵

越智氏尾林氏之系儒家宣公嫡家千代君母堂太

同御子太五郎虎吉之母堂家継公母勝田吉宗公

母堂巨勢紀伊光貞卿母堂等之事を詳に記し附



録ハハ徳川氏之系圖を畧々挙ぐ

一本阿弥光悦行状記

写

三冊

光悦父ハ二郎左衛門入道光二母ハ妙秀光二ハ多賀豊後守高忠次男片岡次太夫子也信長公之御懇意を以て本阿彌光心之養子になり刀劔之事を多く沙汰ハ又秀吉公之事至器之事日蓮宗之事古筆之事を以記す附録ハ光悦光甫両翁之書残されハ及古之事より取出ハたるよしを記す光悦一世之記事殊ハ耳新々ハき話多ハ

一赤穂義人録

一冊

(第壹説)

室新介鳩築 撰

元禄十六年未十月漢字自序

此編ハ淺野長矩遺臣大石良雄等四十六士之傳を挙げ大義名分をよく分明に記す

一吉岡傳

写

一冊

洛陽之刺客吉岡源左衛門直綱弟又市直重世ハ謂憲恒其術ハ長ハ朝山三徳東関林麻宮本武藏等支合之次第從弟清次郎重堅又此道ハ達ハ私怨を以て禁瀬に只見弥五右衛門を始メ数人を殺ハて鬪死す事ハより直綱兄弟跡を晦まハ元

古書保存會



和元年夏四月大坂入城一三宿越前守長則之手  
に属し陥落之後京に歸り明人李三官より黒色  
滌之方を傳へ以て家業利西洞院之巷にありて  
憲法深と号し後年大徳寺円鑑國師之室に入り  
参禪其道を窺ふ事を録す

一明慧上人傳

寫

一卷

沙門高年、紀伊國有田郡石垣吉原村に兼安三  
年誕生す姓は原氏父重國、高倉院武者所也母  
ハ湯淺氏藤原良全字之女治兼四年正月母後れ九  
月又父に後了依て伯母に養せられ養和元年八

(第壹號)

月九日高雄山に登り文字四年十六日にて東大  
寺戒壇院に落髮具足戒を受て建久四年華嚴宗  
興隆之勢に学衆弁論あるを願ひ高雄を去ると  
て

山寺及法師くさくて居れかりす心清くハく  
そふたにて也

夫より紀州湯淺之栖原村に草庵を結ひ唯心觀  
行式隨意別款文同集解脱門義信種義唯心義等  
之撰集せり其後久覺上人所勞難治之由にて  
又高雄へ登山梅尾に閑居衆僧之聖望智により探



玄託之講釈あり元久二年春之比渡采之大願を  
起し春日明神之靈告によりて止り建永元年後  
鳥羽天皇帝宣を贈り柵尾を以て華嚴之勝地と  
定め高山寺と号し月輪禪定供料御寄附後秋田  
城之介入道覚知此所、遁世之事榮西禪師茶之  
實を進しられ初めて當山に植付られし事永久  
之乱官軍將士之妻妾多く御弟子之尼と成り善  
妙寺開基之事画師託間の事貞永元年四月十九  
日示寂一世之傳記なり

一古備烈公遺事

寫

一冊

(第壹號)

湯淺元禎撰

備前少将池田新太郎光政朝臣等芳烈院一世之  
行状記也卷末に觀岡山府学校作市浦惟直著芳  
烈公祠廟記花園會約学校之記也等を載し

一會津神公事蹟

同

同

横田俊益 撰

天和甲子仲夏望日自跋

此書ハ會津中將正之卿事實并保科正之卿言行  
録及家訓十五件贖文八四以上三書を集めて  
編なり



一口碑録

写

一冊

熊澤惟興 撰

卷首文政八年酉秋西御勝映序

此書の宝暦年間執政本多伯耆守正永朝臣一世之仁政美事を挙げ又其家臣数十人の奇事略傳を附記す

一銀臺蹟事

同

四冊

肥後之國主細川越中守重賢朝臣ハ延享四年封襲天明五年十月廿六日六十八才にて卒去一世之御記也公之別館江戸芝白銀臺にありしかハ

(第壹卷)

銀臺侯と申依て坂丹子之名とせり篇中宝暦九

年八月廿日幽齋君百五十回忌に重賢君

くもりなき影に昔一のおもわれて神ハなみ

たの秋の夜の月

天明五年秋の初めより勞にたりす神無月の比

ハはやたのみすくなくならせ給ひけるに時雨

の音一けれハ

時雨下、か明り障子の音斗り

一肥後物語

寫

二冊

卷端天明辛丑之冬亀井魯序



此編ハ重賢朝臣一世之記にて殊ニ熊本改制之  
件ニ其藩政之大体に係りたる事其外侯之美政  
を微細に挙ぐ其條目稲津弥右衛門水損を赦し  
事長岡帶刀大臣之體を備へし事熊本侯学者を  
優待し給ふ事学校にて人才を仕立てる事居業之  
事藪市太郎先手を辞せし事熊本侯内部屋あり  
り此之事蠶織を國中に仕立ちし事家中質素  
之風行わし事徒刑之事平太左衛門箠を試し事  
長岡帶刀平太左衛門を服せし事賄賂追徒路塞  
りたる物語之事經界を正し農民を安堵せし事

(第壹説)

捨子捨馬死罪之法立事長岡帶刀領地之雜劇を  
平民になせし事熊本府春望之事武備調たる事藪  
市太郎寵臣を怒りし事役人撰擧之仕方委し事  
堀原太左衛門隙ありし事三殊勝の事諸國之法  
を取る事等を録す

一南

亭

餘

韻

七

冊

此書一名鷹山侯遺書と号す鷹山公ハ上杉治憲  
朝臣之稱にして秋月佐渡守種英之次男上杉重  
定之為家嗣藩政を改革し学校を取建忠孝之士  
を擧ぐ其第一代之美事を悉詳にす其篇中之在



月ハ時雨之落葉月下之鹿嶋論是嫡鹿篇及哺  
篇孝学篇学門大意長壽篇養好篇芥美篇提撕篇  
老か心挑之落葉千年之基野辺之若菜朝也一酌  
の俵輔儲訓守か、み所壁書蒙養訓百里篇千代  
之春草女五常訓婦行俚解持満説各籍篇厄年无  
大儉差略同大意有耻篇鶴臺費稿叙林祭酒墓碑  
銘讀書會意叙嬰鳴遺稿叙光墓碑銘賀保簡五十  
初度叙高泉記明和御教諭安永御書明和御手扣  
疑問二条媒之繅言参會之心得朝夕論野辺之心  
得恩之俵農官、所諭書元徳院言行録尾藩平州

先生米沢、扣請之節記事大室先生、國家再興  
之節政談之趣以直書問台被申、以節答書平州先  
生、学館再興之節以直書相談之節答書等在録  
せり

一立政録

写

一冊

澤當綱 撰

明和五年子二月漢字之自叙  
此篇上杉治憲朝臣藩政改革之記、以同家、藩  
制職掌其外觀農之事迹、追微細之、其、曰  
右、上杉家再興之節、竹俣美作と申、大夫相著



差出ハ此者政事委任仕ハ者に御座ハ後テ薩摩  
九郎兵衛ト申に相任上西方政事問而慕被成ハ  
ニ付相甘一相傲り手前味噌を唱奉恐入ハ得共  
御懇情ニ付臣下より相唱ハ文面を不相削其俟  
差出ハ

以君ハ賢明之聞ハ高く美事殊更に多キ候なり

一三哲小傳

一冊

睦堂江沢謹修 著

巻端自序花山本信陽漢字小山田與清假字之兩

序文政十一年六月白井信常假字之後叙

(第壹號)

此篇三哲ハ契仲阿闍梨縣居大人鈴屋大人なり  
初めに其肖像を載せ次に小傳また其詠歌を教  
育しるす

一善慧上人略傳

写

全

沙門鉄空 撰

弟子元格超然漢字之後叙

善惠上人ハ法然上人之高足證空之事ト一  
世之行状を詳らかに載せ傳後トハ洛西三鈷寺  
之記を所す此記ハ延宝三年之比撰者之作なり

一海藏紀

年

録

全



沙門令泮 撰

此編八洛東東福寺海藏院師鍊虎閑禪師之年僧也

一尾張國人物志略

寫

同

天野信景 著

此書八國靈尾張大國靈大神國造之始小豐命國司之始小子部連鉏釣造司是補始尾張高稱小舎名小傳在奉月次仁大室以來當國之司補任之官負文治以來國司在司之事尾張國本貫諸姓畧記尾張國古人姓名畧記中世尾張國所生之諸家略

近世尾張國出生武林略記等在編才正德改元仲冬望信景編輯堀禎義校正下下宗職再訂

一西山遺事

寫

二冊

此書八水戸中納言光圀卿之盛德在其臣安積覺中村顧言栗山成信酒泉弘等一卷以錄其文隸書以誌之也三木之幹富田清貞牧野和高等和語以繕寫之且奉仕中所見聞採嘉言懿德附卷末為一本以号西山遺事也其漢字之序以見之たり卷首以水戸家四代之系譜在載也御若年より一代之紀事逐一其證拠在正一御行實在委安其

古書保存會

古書保存會



余御著述之事朝鮮人御性復之事西山御道隱之  
事御薨去之事無漏載之元祿十四年十二月三木  
之葬宮田正貞貞牧野和高等之三臣之奧書且漢字  
之跋なり

一先達遺事

一冊

稻葉正信 撰

明和丁亥秋櫻田江求達序黙并跋

此編先達之風韻氣象或ハ言或行各自高蹈物表  
者家傳語録之外在人口碑所抄録也其先達者所  
謂山崎周中藤方永田養庵淺見綱并梨木祐

(第壹號)

之春原民部野中兼山僧時中三宅尚孫其餘無加  
門人數輩也

一本朝能書傳

二冊

橘 行精 撰

此編ハ本朝古來より名譽之能書聖武天皇嵯峨  
天皇伏見院光明皇后魚養良弁僧正中將姫橘逸  
勢弘法大師藤原敏行十野美材菅公十野道風參  
議佐理大納言公任中納言定信權中納言行成法  
性寺入道後京極攝政弘誓院入道穩念院園白尊  
四親王等之其佳說言談諸書ハ散見也一書入木

古書保存會



抄に拠り且辞書に就て其傳を編修一空海道風  
佐理行成卿之真蹟を附刻寸安政三年状上梓  
一前賢故實 十卷 北丹

菊池容孫武保 著

天保七年陽月松田順之漢字序次撰者自序凡例  
羽倉用九松園道人塩田泰等跋武保孫隆彦之後  
託卷末引用書目録二百六十四部を挙ぐ  
此編上ハ神武天皇之朝より南北朝之末に至り  
賢輔良弼忠臣孝子義夫烈女文雅才藝之徒総計  
五百餘人之圖像に略傳を附記刺又其人ノ詩歌

を像上に掲ぐ然も此圖像ハ専ら古画に則り繪  
巻物繪縁起等より手寫一近俗之画凡を脱し  
るものにて傳より繪を占とす

一屋末飛古傳記

写 四冊

此書ハ保科肥後守正四位下左近衛權中將源正  
之朝臣慶長十六年五月七日之夜御誕生より寛  
文十二年十二月十八日迄去會津赤城山江神  
藁に在り土津靈神と賜り丸延宝三年八月見称  
山之神社而造營成就を成せ一代之日記に  
して天下の大政より藩士に所置まで残り、事



可(別)一乙山崎敬義吉川維足等信仰せり  
次牙弓を詳しかに記載す

一 泰清公遺事

一冊

今藤惟宏 撰

慶應三年丁卯四月撰者漢字之自序

泰清公幼名者虎壽丸寬陽公の嫡子寛永九年申  
四月一日誕生于江戸櫻田即後後四位下侍後叙  
任兼薩摩守諱光久則嶋津氏也延宝元年丑二月  
十九日逝去享年四十二其一世之行状を漢字を  
以て記す

一 慈德公遺事

一冊

今藤惟宏 撰

慈德公諱八宗信幼名益之介宥邦公之長子享保  
十三年申六月十三日誕生後四位上中将兼薩摩  
守叙任寛延二年己七月十日卒去年二十二一  
世之美事行状を記載す

一 慈惠兩大師傳記

五冊

僧正胤海 著

卷首東叡山寛永寺兩大師縁起一表題ス  
慈惠僧正八延喜十二年九月三日近江國一  
生



誕ス父ハ木津氏母ハ物部氏也延長元年五月  
三日登叡山理仙大大徳ヲ師トス同六年刺髮  
后恩訓律師受戒諱良源ト号ス又尊意僧正ヲ  
拜ス登壇セリ寛和元年正月三日入寂年七十  
四永延元年謚慈惠世ト元三大師ト称ス一代  
ノ法賢ノ次第ヲ詳ニ録ス

慈眼大師諱天海陸奥國會津郡高田郷ニ生シ  
芦名修理大夫盛高ノ一族又ハ足利義澄將軍  
ノ末ノ子ト云々不詳也初神藏寺實全上人ニ  
隨ヒ三井権僧正尊實ニ俱舍性相ノ教意ヲ受

(第壹號)

ケ成重ニ從テ神代ノ奥秘ヲ得足利學校ノ道  
卷ニ周易孔老ノ文ヲ讀ミ會津ノ大寧禪師ニ  
教外別傳ヲ發明シ善忍和尚ニ碧巖集ヲ聞后  
武田信玄ニ信セラルル又山門正覺院豪盛ニ惠  
心流ヲ嗣キ文祿二年江戸崎不動院ニ住ミ慶  
長四年武州仙波喜多院ニ移リ同八年下野長  
沼宗光寺ニ轉シ同十二年台命ヲ以テ登台南  
光坊ニ住ス此時始テ康康公ニ謁見同十四年  
昆沙門堂ヲ兼帶シ同十八年日光山ヲ賜フ元  
和三年入洛大僧正ニ任シ同五年於清涼殿法



華懋法ヲ執行寛永元年東叡山草創守澄親王  
ヲ御弟子トス同七年十月二日寂一世之法驥  
ヲ記ス胤海ハ天海ノ弟子也

系譜之部

一神皇實錄

寫

一冊

右大臣從二位藤原園人撰

此書卷端ト姓氏錄別卷書記

神皇實錄一卷ト記  
姓氏錄抄一卷ト記

寸此記編中天神七代地神五代人主首八魂神  
御井神而門神造酒司神大膳職坐神日本大廟之  
御事を輯才奥書ト曰

臣聞陰陽定位裁萬物以先人倫叡聖正名叶五  
音而甄姓氏是以因生之本自遠昨土之基増崇



治帝道而行隆襲王風而興晉也伏惟國家降天  
孫而創業橫地軸以開邦一統祭宇環八列以御  
辨五運無代跨億載而期圖高門接軫甲姓聯衡  
枝葉寔繁汎流弥衆既而德廣所覃古靈靡輟情  
願編戶星陳相尋或撰丘陵而挺跋飛益軒以騰  
華又有偽曾冒祖妄認膏腴證神引皇虛託叢冕  
先鞮鑿其假盪留慮根源昧且臨軒仄景忌瞻今  
臣等謹奉給言開書存之秘藏尋諸氏之苑丘至  
明冠明至聖美聖集為姓氏錄別卷是神皇秘府  
也是萬姓至尸也冷然示掌而已干時弘仁乙未

右大臣從二位兼行皇大弟傳勲功等臣藤原朝  
臣園人別錄

新撰姓氏錄目錄合卮一卷弘仁六年七月廿  
日萬多親王撰定奏聞畢已今此實錄矣姓氏  
錄秘抄序列於別卷不載於官書目錄臣等齋  
持而藏之秘府矣

弘仁十四年八月三日以宮內卿藤原朝臣緒嗣秘  
本祭主神祇大副潤魚書寫

長和六年四月廿日神祇大副大中臣朝臣輔親  
優祭官有恩旨開文軌為一慮弥跪二宮之砂庭



益祈百王之地久照本根之子業扇孫枝之遺爪  
而已

兼文案に此書北畠親房卿之元々集度會家業之  
類聚神祇本源之二部にハ引用すれと其餘大日  
本史と雖不載之但親房卿と家行ハ同時の人に  
一七大廟神庫之重本本と見られ水戸の史官ハ  
疑惑一七採用せざるにや

一神 皇系圖 寫 一冊

此書ハ天神七代地神五代并天御中主神宝座  
之内に掲化八神神八柱神八洲守護之八柱神を記載一

奉了此編裏書あり又奥書あり曰

神皇系圖一卷豊御食炊屋姫天皇庚辰歲攝政  
上宮厩戸豊聰耳聖德太子尊敕撰定而已

永正八年六月十八日書之 荒木田氏秀判

一神 代 御 系 圖 一 帖

平田篤胤 撰

文化十二年九月撰者自叙安政二年男鉄胤之附

記

此書ハ天御中主命より神武天皇に至る諸神を

古書保存會



悉く其系を詳にり、且古史成文神代卷に載せ  
たり神の此系圖に雜記を集めて廿五神を奥に  
加ふ伊吹屋之藏板に

一中 臣 譜 写 一 冊

此書ハ天御中主命より十代天津兒屋根命二十  
一世可多能祐大建まで記舊事記日本紀姓氏録  
本系帳等より抄出なせしものによと思へり

一 荒木田氏系圖 写 一 冊

此編ハ伊勢神宮之神官一門氏二門氏之大系圖  
にして天御中主命より十代天兒屋根命廿八代

神主石敷嫡男佐祢磨是一門之始祖二男田長二  
門之是始祖夫より次第連綿一門にてハ沢村中  
村沃田井之西蘭田等之數氏神代より寛永比迄  
悉詳にす二門の氏人にハ岡田稻木長岑山幡栗  
野中川船江世木家田船橋藤波等之數氏歴世之  
次第を詳細に録せり

一度會氏系譜 一 冊

此編ハ天御中主命十三世天牟羅雲命皇孫天降  
給時供奉是度會氏之祖神にして夫より十二代  
乙乃子命武烈天皇之御宇二所太神宮大神主此



命生四男別四門各賜石部姓一男甬波此裔不知  
二男飛鳥繼體天皇御宇二所太神宮大神主二門  
之始祖也一門弓橫智川田久志本赤畝藤田小須  
須原大世古村松吹上藤本津邊池所岩淵泉四瀬  
河崎橫所西河原松木九鬼田中兼田檜垣氏等之  
家祖也三男水通安閑宣化兩代二所大神宮大神  
主三門之始祖也八代日席主弘仁十四年仁門所  
絕才四男少事欽明天皇御宇二所太神宮大神主  
四門之始祖也一門荒木田岩淵等家祖也不知曩祖  
輩廿五人あり此系僭荒木田氏と八年程微細仁

一門拜官拜任之年月殊仁詳也下八万治次仁到  
了奧書仁曰

右兩門現任正權補宜系圖并不知曩祖輩等交  
各如斯若有遺漏相違事者追可註申也仍註進  
如件

元德元年十一月日

一南朝紹運圖

寫

一冊

天野信景 撰

室永五年仲春自序同三月兵部大輔幸和後叙  
此而系圖ハ後醍醐天皇後打上天皇後龜山院小



倉宮後小倉宮北山宮之六世皇子四十七人皇女  
八人之譜也。就中後龜山院長慶院一主兩号之并  
あり奉之考証<sup>レ</sup>寸或書<sup>レ</sup>に日後村上院崩後皇子  
寬成嗣立文中二年八月二日傳位皇弟熙成隱紀  
伊國玉川里落<sup>レ</sup>餽号法覺理崩後号長慶院紹運錄  
等或稱長慶寺然後龜山帝前長慶院一主也何不  
國之字日記南紀者徃々以長慶院為後村上院之  
次度會延經曰竊按熙成寬成倭訓同兄弟豈有同  
諱乎且新葉集序曰自元弘元<sup>後</sup>醍醐院<sup>至</sup>弘和代  
三嗣歲五十年云々彼集弘和元年辛酉十二月奏

覽自元弘改元辛未至干時實五十一年也。其間所  
謂三嗣者後醍醐帝後村上帝後龜山帝三主而已  
且彼集十六前大僧正賴意及前大納言光有等所  
詠之歌共謂三代者豈虛乎蓋熙成寬成一主而熙  
寬字互用之後以為二人歟。新葉李花等集之長慶  
院之歌則非別主者明矣。又按前祚宮祥子內親王  
号長慶院何襲伯母之院号南帝系圖云後村上院  
第一皇子長慶院於山門自害是亦誤。嘉吉三年於  
山門橫死者万壽寺宮空因而後龜山院之孫也。蓋  
按小倉太上法皇於玉川崩号長慶院法諱稱法理



覺者歟其後龜山院号者称光院之追謚也後人見  
有兩号誤為二帝歟

一 紹運續錄

一 冊

逸水房常 撰

延享三年中冬自跋高辻少弼言家長朝臣後叙  
此書ハ百八代後陽成天皇ヨリ百十八代後攝  
天皇オテ帝王親王法親王諸皇子諸皇女等之御系  
圖ヲ記シ降誕定禪而往行幸御幸遷幸崩御宣下

立坊難津得度轉任配流陽洛等之年月ヲ得テ末  
ニ四親王家御代ニテ附記ス

一本朝紹運要略私記

写

一 冊

此書ハ文明年間ニ書テ了ル之古書ニ一七一  
追号天皇二ハ太上天皇以平後也帝四ハ廢太子五ハ  
薨太子六ハ女院七是攝政関白次第八ハ東寺長  
者次第九ハ醍醐座至次第十ハ天台座至次第  
ヲ記載シ其講ハ假名ヲ附シ早良親王仁居貞躰

古書保存會



仁言仁及之心得へき事少くあり

一 断絶家譜

写

二 册

此編ハ中興名家之断絶也一其家系を記す不謂  
松殿小野宮栗田口月輪土佐一条洞院四条流六  
条大福寺八条柳原流武者小路土御门日野所高  
倉流冷泉勸修寺流吉田壬生海任山勸修寺所南  
家高倉式家京家足利氏室所日野鹿流日野西世  
尊寺一条小一条流姉小路樋口嫡流平松庭田流

田向久我流堀河土御门中院流北畠木造平氏鳥  
丸橋氏薄菅原氏西坊城藤原氏本院枇杷堀河田  
院三条大二条高野藤井北小路室所勸喜门院外  
山今小路正近衛南家桃園牛屋山科高倉流岡崎  
櫻所六条流九条春日四条流嫡家四条冷泉勸修  
寺鹿流土御门中山靈山冷泉四条五条吉田流冷  
泉吉田二家所家小庄葉室流八条栗口堀川岩倉  
土御门壬生流五条小一条法住寺田院流高松河  
躰流八条九条西園寺流清水谷京極今出川大宮  
竹林院洞院流冷泉田条流室所德大寺流河原菅

古  
書  
保  
存  
會



提院大炊所門近衛水無瀬流山井楊梅姉小路鷹  
司坊門丹波栗田樋口中所門流小野三条石山坊  
門高倉白川堀川持明院流一条持明院三家所子  
左流大炊所門五条京極小野宮花山院流堀川鷹  
司五辻烏丸三条大炊所門流鷹司堀川室所流法  
性寺嵯峨源氏北辺廣幡三条四条横川陽成院田  
中源原西七条仁明源氏山科四条文德源氏十野  
宮近院清和源氏南宮桂滋野宇多源氏廣幡鷹司  
六条桂岡崎醍醐源氏小倉西宮宇治村上源氏堀  
川壬生京極坊城唐橋中院龜谷三条源氏小一条

所子後之系源氏花園順德源氏岩藏平氏安居院  
六波羅門池諸氏高階紀氏和氣氏小野氏大江氏  
多治比氏蘇我氏等以上百七十年家之系傳也  
乙官位叙月之年月卒歳迄を録せり

一 智證大師俗系譜

写

一 冊

政書八人皇十二代景行天皇より初記寸蓋一智  
證大師講八円珍則天皇少十三子襲津彦皇子之  
子兼別命より出て父八宝成と云後度僧仁徳之

古書保存會



長子也才主福惟と云ふ此係誘八九百年以前の  
古写此一と三井寺之宝庫に現存す了之外他見  
以之之珍古系誘也

一 淨統略賛

写

四册

沙門懷山 撰

題首に云此一編、元禄九年懷山先師草起之武  
江縁山之賜覺覺者也と一名浄土源流解蒙卷一  
支那傳燈卷二本朝寫瓶卷之諸記指南卷四浄家

紀原附録惠遠相承禮文放光追加浄家歴世之傳  
統誘此書浄家七家数派之系統を克明細に記せ  
り宝永二年三月中院靈山書録

一 武藏七黨系図

写

一册

武藏之七黨といふ是第一小野姓横山黨擇田海  
老名平子平山大貫山崎古郡糟谷大兼号此三家  
才二平姓猪俣黨荏原河勾太田人見岡部藤田横  
瀬号此九家才三日奉氏連姓西黨西由井田村平



山稻毛長沢二宮上田田口高橋等廿家才四平氏  
野與黨多賀谷大藏八条渋谷金重鬼窪白岡等十  
九家才五平氏村山黨大井金子山口横山久米仙  
波難波田宮寺等十二家才六有道氏兒玉黨庄塩  
谷秩父竹沢奥平白倉岡崎中条淺羽入西倉賀野  
等五十六家才七丹波姓丹黨葉名中村青木長田  
勅使河原<sup>原</sup>小島加治野上長田安保清水新里等四  
十四家之系図なり

一中村家系図

寫

一冊

(第壹號)

此書ハ江州坂本笠川氏之重宝也一ト豊臣秀吉  
公御寶文中村筑阿彌之手寫也<sup>村中</sup>當家由緒系  
圖ト標記<sup>了</sup>藤原姓ハ一ト房前大臣之裔也中村  
弥右衛門剃髮筑阿彌ト載<sup>了</sup>流布本ハ寶父弥右  
衛門継父筑阿彌トあるハ誤<sup>了</sup>なり<sup>了</sup>歟秀吉公ハ  
高吉ト載<sup>了</sup>たり奥書ト曰

右系図被仰下ニ付略系掛而目申ハ  
中村  
竹阿彌

兼文此系圖を見<sup>了</sup>極惑少<sup>了</sup>なり又笠川氏之



古書に是不審一き限ありて筑所彌之手簡も教  
通傳、九、南朝時代之文書にハ殊に説ありと  
雖も考証之為爰に挙く

一 寛永諸家系圖傳

写

百七十二冊

羅山林道春 撰

卷端寛永十九年五月十一日傳示諭其條例二篇  
を載す此系圖傳編集時所作也但示諭者所告集  
會衆中也此時羅山為總裁其男怒也掌清和源氏

部故作條例被示之其系藤原氏平氏諸氏部并此  
系々損益之編輯始末者見序文卷一より六迄清  
和源氏義家流新田得川松平正統鹿流支流卷七  
八松平別流酒井小栗本目小沢卷九新田別流山  
名志賀由良大島田中鳥山卷十足利流喜連川宮  
原蔭山吉良今川蒔田瀬名高林卷十一細川三河  
畠山上杉卷十二最上一色丹羽土屋卷十三榊原  
向井卷十四板倉花房荒川卷十五為義流島津卷  
十六立花本堂馬場野々山卷十七義家流義時流  
石川卷十八義隆流森押田卷十九頼光流池田卷



廿淺野卷廿一大河内太田垣岡高田卷廿二土岐  
卷廿三中川伊丹多田卷廿四仙石植村島田妻木  
保、楫斐德田肥田卷廿五平岡能勢福島清水落  
合卷廿六賴親流高木卷廿七土方石河依田大森  
幸田朔日江河卷廿八安多村上卷廿九賴季流保  
科井上卷卅赤井須田卷卅一義光流佐竹山本福  
村卷卅二逸見溝口飯田青沿卷卅三五保田岡  
田曾根平賀小佐手下曾根安多東條卷卅四内藤  
米倉栗原大井仁科駒井卷卅五伊沢酒依高見北  
尾津金新見牛奥山高青木柳沢曲湊近山岩手野

川馬場入戸野卷卅六卅七小笠原卷卅八南部下  
山淺羽淺原大井仁加保卷卅九三好林上田伴野  
中島打越丸茂部卷四十秋山高林溝口加賀美  
安井水上卷四十一長坂日向内山山中窪田今井  
高室市川五十嵐卷四十二甲州支流折井田沢櫻  
井清野飯室雨子深見曾雄鎮目小宮山小菅塚原  
久保田卷四十三滿政流水野卷四十四山田岡田  
彦坂小島卷四十五滿快流諏訪安部有賀片桐知  
久屋代松本諏訪部飯田卷四十六支流蜂須賀金  
森卷四十七支流牧野西野竹中柴田卷四十八支

古  
書  
保  
存  
會

古  
書  
保  
存  
會



流松井本郷本間白坂卷四十九支流西尾小坂富  
士伏屋春田小長谷矢頭佐脇芝山尾崎尾関卷五  
十支流稻垣石丸山下正木勝矢堀越小泉竹尾春  
五十一支流分部小俣千村小川菅波厚高付小田  
切市岡富田卷五十二支流山口辻中村小倉雀部  
澤越智多喜麻田卷五十三藤原氏山蔭流伊達卷  
五十四良阿流上杉如々美宝間朝比奈矢部中山  
卷五十五井伊卷五十六秀郷流鍋島近藤卷五十  
七山内五味荒木石尾今村関富田木村卷五十八  
九内藤卷六十青山天方卷六十一皆川太田卷六

十二水谷小川卷六十三長谷川池田河村武藤平  
林中野森卷六十四佐藤伊藤波多野鎌田小山大  
屋卷六十五佐野松田高柳藤井山上牛込卷六十  
七兼通流木多卷六十八道隆流大森三雲卷六十  
九道兼流大久保卷七十字都野岡屋小幡田中浅  
岡卷七十一利仁流加藤卷七十二堀林卷七十三  
遠山西山後藤卷七十四麻夏都築進藤足田竹田  
卷七十五真夏流日野卷七十六長良流有馬大村  
卷七十七良方流糴屋卷七十八師本流堀内淡谷  
卷七十九頼家流大沢卷八十長家流那須福原千



本芦野須藤筑紫卷八十一為憲流岡部六鄉奥山  
藤川宇佐美卷八十二伊藤卷八十三相良舟越石  
谷入江與津原卷八十四負嗣流蛸屋大道寺天野  
卷八十五交流藤堂中根卷八十六戸田市橋卷八  
十七丹羽兼松松波松倉石卷松崎松凡松打卷八  
十八小出川奈伊奈猪子駒木根山野國領小泉卷  
八十九脇坂卷九十古田荷田河田難波田細田柴  
田權田田中重田稲田杉田持田指田奥田卷九十  
一津輕多羅尾成瀬卷九十二鬼櫻井酒橋井花井  
卷九十三秋元佐橋渥美淺井清水岩瀨岩間高林

速水木内岩佐坂尾秋鹿卷九十四新庄柳沢若林  
竹内遠藤藁科伏見竹本竹生竹村根岸卷九十五  
戸川大河原杉原高原笠原石原早川川上西川川  
合浦野卷九十六日根野野間初鹿野市野吉野大  
野真野末吉平野卷九十七桑山山角山田横山杉  
山外山葉山山崎丸山山中卷九十八三宅三木三  
橋角南三神三田万年篠瀨武藏矢嶋高城卷九十  
九内田坪内村越村瀨卷百小堀小林大橋卷百一  
久貝倉橋久保中坊中沢中西倉沢熊沢卷百二神  
尾神谷松木蔦木卷百三宮崎所手洗永田守田宮

古  
書  
保  
存  
會



厚加茂宮雨宮宮田仙波宮重卷百四大岡大草岡  
上岡谷卷百五根來座光寺柳原大塚稻生石來卷  
百六小濱落合夏日葉島福生足立行方未高羽太  
金丸武者井狩名取垣部卷百七寬神島乾沼勝沢  
館卷百八井戸筒井細井井氣多福井井上井口卷  
百九德永春日比企深津橫津<sub>地</sub>廣戸比留卷百十平  
氏清盛流織田嶋中川津田藤掛宗梶川関長崎卷  
百十一北条流高力岡野平野卷百十二繁盛流岩  
城城玉虫小栗卷百十三良久流三浦正木佐原奥  
平土屋相馬朝比奈柴村喜多見卷百十四中根荻

田板橋長井豐嶋永尾高山三田酒井遠藤杉浦佐  
久間秩父小幡卷十五伊勢流伊勢杉原卷百高棟  
流柘植卷百十六支流鳥居梶金田高井松田宮城  
神田三嶋猪飼戸沢卷百十七奥山岩下山本山口  
長田中村森山<sub>山</sub>大武曾我久留南條飯塚原本上原  
三井佐治卷百十八編富川口坂部原田坂井矢橋  
安西真野山中野辺河内飯河卷百十九菅原姓前  
田卷百廿柳生美濃部設樂久松竹島余語沢前田  
百廿一大江姓毛利卷百廿三永井毛利淺井卷  
百廿四宮城山村卷百廿五宇多源氏黑田間宮木



村卷百廿六京極谷和田野一色卷百廿七朽木松  
下卷百廿八山崎建部田付大原伊吹平井野河添  
勝部三上小倉卷百廿九龜井吉田小西永田横田  
井口卷百三十森川富永卷百卅一佐々木佐々西  
尾深尾水原土屋卷百卅二村上源氏有馬進石野  
木造別所一尾藤方藤井萩原卷百卅三久世星合  
卷百卅四嵯峨源氏松浦渡辺向山多門卷百卅六  
文德源氏大橋卷百卅七紀姓堀田寺沢滝川菅谷  
田辺卷百卅八安部<sup>倍</sup>姓阿部卷百卅九秋田貴志岸  
沢柴山阿倍卷百四十越智姓稻葉河野菴原卷百

四十一一柳久留嶋卷百四十二滋野姓真田海野  
布下卷百四十三服部姓服部豐臣姓木下卷百四  
十四三善姓所野布施良峯姓丹羽長塩卷百四十  
五飯高姓飯高橋姓高橋卷百四十六丹治姓大  
田原大関中山青木卷百四十七日下部姓朝倉八  
木前場日下部卷百四十八大伴姓山岡篠山  
伴卷百四十九田口姓牧野大神姓藤林三枝部姓  
三枝野宮卷百五十小野姓横山小野岡部岡黒川  
猪俣永見木部萩原卷百五十一中原姓石野多賀  
卷百五十二清原姓西沢在原姓荒尾豊原姓青山

古書保存會

古書保存會



卷百五十三橘姓甲斐庄會田長谷川紅林山田野  
尻松井淺井黒田福富大平牧井関山中三好卷百  
五十四惟宗姓神保賀茂姓久永宮道姓蜷川高階  
姓志村弓解姓平岩卷百五十五大藏姓秋月秦姓  
河勝鶉殿卷百五十六清川姓野條坂上姓田村卷  
百五十七多之良姓山口穗積姓鈴木前田卷百五  
十八未勘米津高井青柳小知深谷諸星山瀨内川  
下島塩入川井勝有泉石渡佐脇松野伊達卷百五  
十九戸塚勝屋築田天羽岩波前島石井竹口野口  
中田河西根來大津大谷由比卷百六十大柴栗屋

細市柳瀨松崎松永有田戸張里村西川卷百六十  
一醫師駟庵松安龜庵良庵宗琢卷百六十二道三  
養安院道琢元庵玄孫道円清雲卷百六十三竹田  
上池院壽三盛方院意安專益卷百六十四施藥院壽  
命院安栖與安久志本徹孫卷百六十五玄治玄琢  
道安玄昌玄竹道陸道有卷百六十六策庵元德長  
徳院甫庵如成泰春太田次兵衛卷百六十七伯庵  
甫庵永庵了俊津左馬卷百六十八紹高本覺養  
泉金保卷百六十九同朋福阿弥丹阿弥才阿弥觀  
阿弥珍阿彌盛阿彌卷百七十茶道宗傳善良宗円

古  
書  
保  
存  
會

古  
書  
保  
存  
會



利麻良雲此餘序文略圖一卷示諭共目錄一卷合百七十二冊也

此記釣命新降群僭屢捧松平正統一冊者非今度諸家所執者今考旧記呂述其事踵而尊其正統明其鹿流之所出鹿流繁多今分為四冊且作略圖一冊以便觀覽也諸流大抵因嫡鹿考其分派以為次序云武家系圖之大成と云ふべし

一 東照宮年譜

写

五冊

林羅山道春 撰

正保三年四月十七日尾張大納言義直卿序

此書八天文十一年十二月廿六日家康公三州岡崎城に誕生より元和三年四月十六日神於野州日光山、遷座あり、また、此詳細に記す

一 藩翰譜

写

廿二冊

新井筑後守君美 撰

此編元禄十四年新命を奉り七月筆を起し十月



脱稿之由諸侯三百八十七家之譜に慶長庚  
子に始め延宝庚午に終了其間之盛衰載之又此  
本に五卷之系圖を附したるあり或は頭書に記  
したるもあれと流布本にハ卷一五卷系圖之末  
卷ハ欠國諸侯之部にして蒲生金吾福島加藤最  
上堀尾田中中村筒井里見生駒寺沢富田稻葉德  
永西尾古田山崎其他四十有餘家密あり疎あり  
其世系數十代連綿之旧家又ハ三五世之新家ハ  
あり此譜ハ徳川氏尾紀水越前家ハ除くを以て  
此系圖にも不載也

一續藩翰譜

写

廿三冊

此編ハ幕府之命を奉り奥御祐筆組頭近藤吉左  
衛門格名瀬源五郎奥御祐筆秋山松之丞其外表  
御右筆号教人之撰集にして上ハ延宝八年より  
下ハ天明六年に至り迄合る百七年之間万石以  
上諸侯之盛衰を詳かに載せたり文化三年十  
二月十六日編輯掛りへ而褒美并領等あり



一畠山家譜

写

十二册

此書ハ清和源氏畠山家歴世之譜ハ一畠山傳  
同事総同家紀同實記同私記同稔誌同私章同證  
誌記同譜々々之數名あり元弘元年より起り慶  
長三年に終了其間尾張守國清右兵門佐基國尾  
張守滿家同持國同政長右兵門佐義就宮内少輔  
政國能登守義統下総守義豊左兵門督尚長左兵  
中督義堯下総守義英治郎高政右京大夫尚氏上  
総介昭高等大和紀伊河内能登之國々々於て争  
戰同家之沿革日次を以て録せり

一宗氏家譜

写

三册

對府之臣平田真賀加納貞清陶山存之三士奉國  
命編修する処也卷末に元禄九年三月加納幸之  
助奥書卷端ハ貞享三年十一月宗對馬守義真  
序  
此編ハ宗氏始祖相國清盛三男中納言知盛卿第  
三子判臣知宗母者宗判臣信房女也故以母方姓

古書保存會



為氏元曆元年知宗誕生より北三代之孫對馬守  
義成之世迄歷世之譜にして就中三代目右馬允  
國為蒙古戰歿九世讚岐守貞盛小式嘉頼を本國  
へ令歸後北二代對馬守義智朝鮮之役武功を顯  
す其事件等殊に委詳也義真ハ義智之孫義成之  
嫡子也明曆四年十二月廿六日於江戸義成病歿  
一義真嗣封に了將遺事一卷附録す此編中宗氏  
系圖且引抄書目其外歷世之漏肥を舉ぐ

一井伊年譜

寫

十冊

(第壹號)

功刀君章子含 著

此書卷端に井伊家之系圖を載此年譜ハ寛弘七  
年正月元旦始祖備中守藤原共保出誕より享保  
十五年二月迄之家記にして編中真政真孝之事  
跡殊更明細也功刀氏ハ其藩臣也故に每事詳な  
り中大坂之役尤正しく沃村維明之按所にして

一井家新譜

同

二冊

古書保存會



松居介内親久 撰

享保四年仲冬自叙欽所平維明序九例

此編元來ハ國本半介宣就所撰井伊系譜を増補

一諸家之祕録を参考一初名井家実録改日新譜

卷首ハ井伊氏之系図を載一一条院正曆之始藤

原共資来自京師居遠州敷智郡祈禱井谷神祠得

而一男児立為嗣是井氏之元祖也而共保也夫より

十二代信濃守直平属今川氏家業寢隆にするに

起一真宗真盛真親直政直孝直澄直與直通直垣

に到り宝永七年十月四日卒去に終る卷中関ヶ

原大坂冬夏之合戦等ハ極めて微細也

一 細川家系図

写

一 冊

此編ハ清和天皇より細川の正統越中守治年之  
世安永年間まで其鹿流之系図を委敷記一巻  
末にハ三淵家之元祖大和守持清より伊織介澄  
解ハ及ハ且長岡氏之教代を併せて録せり

古書保存會



一 蜂須賀氏系圖

写

一冊

洲本府河野逸 撰

此書蜂須賀氏之元祖小六正昭ハ足利尾張守高經之末にて正昭より初記す大永七年九月五日卒す其子正利正勝家政至鎮忠英光隆綱通綱継家貞宗英宗鎮經央重喜治昭祿昌以上十六代庶子に到りて録し其末家六氏を以候七書す此書或ハ渭津外記に附したるもあり

一 新井家系

写

一冊

新井筑後守君美 著

享保癸卯七月漢字自叙

荒居荒井新居新井皆同一然而多治比姓源姓の二氏あり事を述へ新田之属流中世所々に流寓す了奉君美之家祖勘ヶ由之事蹟より父正海之始末等を書記す新田一姓と雖も勘ヶ由の以前ハ不知よしを述ふ



一岩松家系附録

同

全

新井筑後守君美 著

享保己巳門人平元成漢字序

此書ハ新田家岩松氏之興广盛衰より横瀬雅樂  
介逆謀其主岩松昌順純を弑し其砌家系文書記録  
灰燼に及び天文弘治之比横瀬改由良氏豊臣公  
徳川氏に後して義貞之遠孫と偽り源氏之正統  
を以て家を興す事浪人正木新右衛門新田家之  
旧記を所持し由良信濃守に計られ元祖義重新

田庄下司職に補せらる下文を奪取し、事岩松

満次郎沉倫之事卷末に到り畧系譜を載す

一名和氏紀事

二冊

門脇重綾 著

會澤懋祿堀熙明兩序文久二年九月撰者之跋飯  
田年平之假名後序卷首題字ハ國君慶徳朝臣也  
此記ハ伯耆守名和長年之勲績を諸書より抄出  
し伯耆卷并名和系譜を補助す下卷之巻端にハ

古書保存會



長年子孫歷世之系譜を挙げ其傳を詳かにす安  
政五年五月國君少將慶徳朝臣建造之碑文を載  
せ附録には後醍醐氏之世系を略出―後附にハ  
南朝諸家傳より名和一族之條を鈔出す

一 武林系圖

写

二十冊

此書ハ撰者詳かりし序跋を―近時世上に流  
布す―処本朝武林傳家忠日記陰徳太平記戸次  
軍談大友記最上記三河記武家評林系圖武家大

系圖中興武家盛衰記西國盛衰記等の数書に誤  
れ了系譜を参考せ―処にて其家ハ島津伊達  
有馬毛利大友源三藤立花隅嶋龍造寺岡部大河  
内酒井奥平南部柳原最上井伊大久保吉良久松  
土井保科本多石川土屋太田鳥居水野戸田土岐  
朽木柳生山口大田原板倉宮城真田菅沼稻葉一  
柳戸沢牧野秋月伊藤東相良堀田宗高木丹羽青山  
大関北条諏訪片桐那須松浦遠藤三浦堀相馬秋  
田福嶋木下豊臣朝倉里見渡辺明智菊池六角等  
之六十九家之系圖を略記す



一中院系譜

写

一冊

中院ハ村上源氏にて村上天皇御子中務卿具  
午親王分七世内大臣通親五男大納言通方を以  
て才一世とす通方之次男内大臣通成才二世た  
り三男権大納言雅家ハ北畠家の祖也以来歴世  
北四代當正二位通富卿に到り附録に北畠雅家  
より十四代参議親顯に到り次に木造家之祖正  
三位顯俊より十代左少将具梁に至り次に大河

内左中将顯雅より四代権中納言親春に到り以  
上三家共絶家之系譜を七記載あり

一十家系圖

写

一冊

此書ハ出雲國造之系圖にて天照大神才二御  
子禾穗日命子武夷鳥命を以て才一世と為り十  
一世氏祖命之世始めて國造之右見中北四世廣  
嶋始めて補任を載す正平年間五十三世孝宗之  
世弟貞孝分派に及び國造兩家と成を以て孝宗



自ら先家又前家と稱す是則干家之原由也貞孝  
ハ別に北島と稱す是より七十九世當時之從五  
位尊福迄連綿神孫血統相續す系譜を微細に  
載す

一 北島系圖

写

一 冊

出雲國造北島氏之世系ハ一々其元祖天穗日命  
ハ古事記に天菩比命に作り風土記にハ天夫比  
命に作る其十八代宮田臣及正天皇為國造始賜

出雲姓五十四代孝時之次男清孝ハ五十五代を  
嗣き其才三男孝宗を家督とす是干家之祖也才  
四男貞孝五十六代を嗣き北島氏の祖とす是國  
造兩家分る、処也夫より七十五代當從五位全  
孝に到り血統連綿之家系也

一 阿蘇氏家譜

曰

全

大宮司阿蘇氏ハ阿蘇大神を以て大祖とす大神  
才一而子速瓶玉命崇神天皇御宇阿蘇國造ハ定



め給ふ是阿蘇氏人臣に列せし始にて世々其職  
を襲ふ其子惟人命又彦御玉子命景行天皇御巡狩  
之時勅して特に祭祀を司らしめ給ふ是大宮司  
之始め也其後治兼中大宮司惟泰菊池隆直と平  
氏に及き兵を起し然も安徳天皇に隱忠を尽し  
益城郡五ヶ庄に足利又太郎以下平氏を潛匿せ  
し玉弘安蒙古合戦ハ文書散失して所傳なく元  
弘之役惟時惟直忠誠を尽し延元元年三月二日  
惟直惟成多々良濱に忠死す一族惟澄を北朝大  
宮司に任し南帝ハ惟武を大宮司と任す文中四

年六月征西宮惟武に日向之國を賜り天授二年  
八月筑前蟻打に惟武今川了俊と戦ひ戦死し元  
中二年正月惟政家職を嗣同十年豊後日向を賜  
る此比阿蘇氏も二派に分れて互に忠戦武功を  
顯す應安八年二月惟村從三位に任し其子惟卿  
も應永三十年十一月從三位に任す此時惟武之  
孫惟兼と嫡庶之爭論ありと惟村早く足利に屬  
し武功あるを以て終り惟郷を本宗とす天文中  
惟豊家老甲斐武に秀て隣國を候し天正中惟將  
惟種相絶て平し嗣子惟光幼弱家臣内乱之虚に

古書保會

古書保會



乗一島津氏か為に累世之所領を失ひ尋て豊公  
も又旧領を悉く没収一後年其旧家たるを以て  
矢部三百所を惟光惟善に賜り慶長六年清正徳  
川氏に請ふて惟善を大官司たり一め千余石之  
地を阿蘇社に寄附一三百五十石余を惟善に賜  
ひ万治中大官司友貞近衛家之執奏にて位階を  
賜ふ事也也を記せり

一坊城家譜

写

一冊

此家譜の元文二年壬十一月十五日関白殿之命  
により頭弁兼胤朝臣頭中将重撫朝臣一権大納  
言従一位俊清卿より被書献処にて當家之元祖  
經俊卿より其子俊定定資俊實俊冬俊任俊純俊  
國俊秀俊顯俊名俊昌俊直と連綿一俊直勸修寺  
家相統するを以て次男俊完相継ぎ其子俊廣俊  
方俊清也次て俊清之子俊将俊逸俊親俊明俊迪  
俊克俊政政之世文久年間迄書継きたり

一本願寺系圖

同

全



天御中至尊十代天兒屋根命廿一代鎌足公十八  
代皇太后宮大進有範之嫡範宴則親鸞上人是也  
本願寺之元祖に於て其十一代顯如上人之世西  
本願寺興正寺三门跡に分派本願寺ハ良如上人  
東本願寺ハ琢如上人に到り其子弟嫡庶を委爰  
記一且卷後に大系圖を抜抄して其謬を正す兼  
文見了処此系譜之類本数多ありて相違不少依  
て数本を集め校合を加一本と交せしあり

一水谷川系譜

写

一冊

水谷川氏ハ旧南部一乗院家に於て天禄元年小  
一条左府師平公之男大僧年都法印定昭を祖先と  
す二代已講定好三代真範大僧正に初任廿一  
代迄攝家より系續多し廿二代玄円親王ハ後醍  
醐天皇才十三皇子也廿三世権少僧都實玄より  
廿四世迄准三后尊勢迄又攝家より入寺廿五世尊  
覺親王ハ後陽成帝才十皇子也四十三世迄ハ伏  
見有栖川之皇族より其流を嗣れ當四十四代從



五位忠起ハ近衛忠熙公之息男也此歴世之譜を  
細詳に録す

一 松園家譜

写

一冊

松園氏ハ旧南部大乗院門跡にして長歴二年法  
印権大僧都隆禪を祖先と一二代頼實ハ源満仲  
之孫也三代尋範ハ太閤師實公の男四十九代義  
尋ハ將軍義昭之男也此一世を除く之外ハ悉く  
攝家より入家なり系統中再任職之人殊に多し

又大安寺長谷寺興福寺某師寺橘寺等之別當職  
を兼帶す了少なかりさ了也

一 宮城家系譜

写

一冊

宮成氏ハ宇佐姓にして代々豊前國宇佐八幡宮  
之大宮司たり天三降命之子菟狹津彦命を以元  
祖とす則到津家と同系にて其系譜を比較す  
に宮成にハ三代雅屋十九代豊川とあり到津家  
に漏り四十二代公世之嫡公浦ハ宮成之始祖三



男公連ハ到津之祖也七十代當後五位公矩に到  
了迄記載ノ字佐津彦命ハ神武天皇日向國より  
祭向一ト豊前國宇佐に到り給ヒ一時始テ宇佐  
國造に任せられ七代即春豊玉賢仁天皇より所  
春姓を賜ヒ十三代宇佐公武雄白鳳七年宿禰姓  
を賜ヒ御春と改め宇佐宿禰と稱す十七代<sup>池</sup>守  
ハ天平勝宝元年大宮司に任一享年三百余歳に  
テ卒す記す國史に不載処不審也

一到津家系圖

寫

一冊

宮成家同系にて菟狹津彦命四十代公世之三男  
公連豊知國企救郡到津庄之地頭と成り該地に  
任居せ一時到津を以<sup>ル</sup>族となし爾來之を稱す  
十六代池守之条に五十二代嵯峨天皇御宇弘仁  
年中任大宮司壽三百余歳と載す今兩家之譜を  
比較するに惜乱不少六十三代當從五位公誼に  
到りまて記せり

一誚家大系圖

二冊



生川春明 著

天保九年春樓寫峯并著者之兩序次引用書目二百七十三部を挙く山崎美名之後叙此書ハ守武貞徳西鶴芭蕉<sup>之立</sup>圃重頼令徳西武季吟梅盛未得安静玄札成安正式加友一雪貞兼松堅卜養友次良保尺山言當宗因松意高政露沿三千凡以下都て俳家六百八十三人之系譜也り略傳迄録せり天保九年四月上梓

一補任要録

写 十 冊

山科大納言言續卿 撰

巻端自序に公卿傳と記す勒成五巻編とあれハ始めハ五巻成一を増加せられ也奥書に

右補任<sup>御筆</sup>卿<sup>御筆</sup>水無瀨黄門<sup>兼成卿</sup>借用就而者

天正十年六月二日陽光院宮<sup>二</sup>殿織田三位中將信忠楯籠討死回禄其砌件本紛失早以日野垂相<sup>輝光卿</sup>本馳充筆者也

古書保存會

古書保存會



文祿二曆八月廿七日 從二位藤言繼

此後萬治二年まで猶連續すれば追々に加筆

せしものにて公卿補任八年序を以て記載し

此編ハ各々の傳書にせし藤簡便にて覘易し

卷一 神武天皇雖起筆開化天皇迄九代者時

臣不見崇神天皇遣使四道然無臣連之跡垂仁

天皇御世阿部臣等五氏祖奉詔議政而惣称卿

等猶無官號景行天皇御世武内宿祢棟梁臣之

名始而有之以来至稱徳天皇神護景雲元年

卷二 自光仁天皇宝龜元年至花山天皇寛和

二年

卷三 自一条天皇永延元年至崇徳天皇保延

五年

卷四 自近衛天皇康治元年至順徳天皇兼久

三年

卷五 自後堀河天皇貞應元年至後宇多天皇

建治十年

卷六 自伏見天皇正應元年至花園天皇文保

二年

卷七 自後醍醐天皇元應元年至崇光天皇觀

古書保存會



應三年

卷八 自後光嚴天皇文和元年至稱光天皇正

長元年

卷九 自後花園天皇永享元年至後柏原天皇

大永六年

卷十 自後奈良天皇大永七年至後西院天皇

万治二年

一 衛門補任

寫

一 冊

左右衛門督之補任也

天平神護元年八月藤原是公轉左衛門督より

後醍醐天皇御世正中三年六月十九日左衛門

督藤原冬方權中納言に任せり

一 辨官補任

寫

十一 冊

左右大中少權辨之補任なり

一條天皇永延元年より後櫻町天皇明和四年

に到る



一職事補任

写

二冊

別當職更補任なり

卷上

自嵯峨天皇弘仁三年至後深草天皇正

元元年

卷下

自龜山天皇文應元年至後西院天皇寛

文二年

一樂人補任

写

一冊

自天治五年十一月至建保六年九月十四年間の補任也

奥書

右樂人補任記一冊或書藏秘之蜜々令書写  
了

寛永二年十二月

此一冊以甲斐守近壽宿稱家本命傭書写之  
早

天明四年六月

從三位時章

平松



一 近代補任

写

一 冊

此編ハ天文元年より天保三年まで三百八ヶ年  
間之補任にして年序を以て書記す家譜にあらず  
さるゆゑ見易く至極簡便なり其奉る処の守等  
次第ハ

- 関白 攝政 太政大臣 左右大臣 内大臣
- 准大臣 左右大将 大納言 中納言 参議
- 少納言 辨 藏人 左右中将 左右少将

以上

一 諸家傳

写

二 冊

大納言藤原公定卿 撰

此書一名諸家近代傳と稱す上ハ弘安年間中  
り下ハ慶長之末年に至るまで諸家之叙任よ  
り薨去の年月を記し且其各家ハ祖先より微  
細に至る語を奉く其家ハ  
近衛 九條 二條 一條 室町 一土佐條







右大臣

自嘉慶二年五月廿六日任

具通

至文化十二年二月廿六日任

政通

內大臣

自嘉慶二年五月廿六日任

經嗣

至文化十二年二月廿六日任

齊信

權大納言

自天明四年十二月三日還任

愛<sub>親</sub>信

至文化十二年二月廿六日任

輝弘

權中納言

自天明元年十二月十一日任

通古

至文化十四年二月廿五日任

為弘

參議

自天明元年十二月十四日任

忠尹

至文化十三年九月廿二日任

實楫

侍從

自天明元年三月廿六日任

資延

至文化十四年四月十二日任

時雍

左右中將

自天明元年正月二十六日任

通直



至文化十三年八月廿一日任

忠熙

左右少将

自天明元年三月十八日任

實綱

至文化十二年二月廿六日任

隆起

此補任左右大將少納言辨藏人之漏た了ハ如

何に及や

平松時雍卿以自筆本所出抄也

一近世官職補任

写

五冊

撰者知り寸以日野家本其大綱を挙ぐ

撰 関

元歴元年正月廿二日為

基通

百三十二人

文化十一年九月十六日為

忠良

太政大臣

應永元年六月五日任

實時

二十九人

安永九年十二月廿五日任

尚實

左大臣

寛文元年五月廿四日任

定好

二十八人

文政二年六月一日任

政通



右大臣

元和七年正月十二日任

康通

四十七人

文政三年十月十五日任

研信

内大臣

美應三年六月十七日任

實晴

八十九人

文政四年四月七日任

尚忠

權大臣

元祿十四年二月廿七日任

實陳

二百三十三人

文政四年八月十九日任

輔熙

權中納言

正德五年十一月廿五日任

公詮

二百七十八人

文政四年四月十二日任

行宣

參議

享保五年十二月廿八日任

保光

二百四十一人

文政四年三月廿一日任

經則

少納言

天和三年九月廿一日任

在庸

六十五人

文政元年五月廿八日任

在賢

左大辨

寬延元年八月廿二日任

光胤

二十二人



文化八年十二月廿一日任 建房

右大弁

明和五年三月十四日任 宗美

文化八年十二月廿一日任 明光

左中弁

元文二年十月廿三日任 規長

文化八年十二月廿一日任 俊明

右中弁

宝曆八年九月十八日任 俊臣

文化八年十二月廿一日任 經定

左少弁

宝曆四年正月廿六日任 資枝

文化八年十二月廿一日任 光成

右少弁

宝曆八年四月二日任 伊光

文化八年十二月廿一日任 顯孝

權弁

宝曆八年九月廿五日任 光豫

文化八年十二月廿一日任 經則

造興福寺長官

古書保會

(第壹號)



享保十四年四月一日為

光網 十人

文化五年七月十一日為

建房

侍從

天明六年三月六日任

公春

文政四年三月廿六日任

為國

式部大輔

享保十五年十月十五日任

總長

文化八年二月一日任

在經

同權大輔

宝曆十三年五月十七日任

為俊

文化九年六月十五日任

為顯

大内記

慶長十五年二月十三日任

長維

文化八年十二月廿一日任

總長

文章博士

元文元年二月廿三日兼

在秀

文化十四年九月十五日兼

為定

民部卿

寬保三年六月廿九日任

雅喬

文政三年十一月廿五日任

為訓



治部卿

寬延三年八月七日任

泰邦

八人

文化三年正月十八日任

信昌

刑部卿

享保三年六月四日任

光

和  
十一人

文化九年十二月十九日任

泰行

大藏卿

寬保三年六月廿九日任

重豐

十一人

文政三年三月十七日任

惟德

宮内卿

享保十五年十二月廿六日任

廣仲

九人

寬政十二年七月一日任

能光

中務大輔

元文元年正月六日任

光全

十五人

文政四年正月二十日任

兼季

左大將

天和二年十一月十八日任

公規

二十八人

文政三年正月十七日任

尚忠

右大將



寬文元年十二月廿四日任

基熙

四十八人

文政四年四月十二日任

經文

左中將

天明元年正月廿六日任

通直

五十六人

文政三年三月十九日任

實久

右中將

天明元年正月廿六日任

雅威

五十九人

文政四年四月廿六日任

重芳

左少將

天明元年三月十八日任

為起

五十四人

文化十一年十一月七日任

實兄

右少將

天明元年三月十八日任

實綱

四十七人

文化十二年二月廿六日任

隆起

左衛門督

元祿十六年十二月廿七日任

冬熙

二十八人

文化十年七月十一日任

雅光

右衛門督

元祿十四年十月廿四日任

行豐

三十人

文政元年九月廿六日任

建房



左兵衛督

元祿十六年十二月廿六日任為綱

二十一人

文化十年八月十日任

永雅

右兵衛督

元祿十六年十二月十八日任有胤

二十一人

文化十二年二月廿六日任

為倫

左衛門佐

寬延三年九月廿四日任

兼隆

十人

文政元年二月五日任

政直

右衛門佐

享保十三年五月二日任

盛仲

十人

文化十三年四月八日任

行道

左兵衛佐

寶曆六年九月廿二日任

尚具

九人

文政元年正月廿二日任

時誠

同權佐

享保四年十二月廿七日任

惟肅

十二人

文化十二年二月廿六日任

恭克

右兵衛佐

享保四年十一月廿六日任

宣香

十二人



文政二年正月廿二日任

光暉

同權佐

宝曆五年五月六日任

公純

八人

文政四年正月二十日任

延房

左馬頭

元文四年十二月廿日任

實岳

十一人

文政三年三月十九日任

重德

右馬頭

元文四年十二月廿日任

重慶

九人

文化十四年九月十日任

純通

彈正大弼

寬延二年正月十日任

惟久

八人

文政元年二月五日任

道吉

同少弼

寬保三年八月廿九日任

氏榮

八人

享和二年正月十四日任

定孝

左京大夫

寬保三年八月廿九日任

基棟

六人

文化七年二月一日任

資善

右京大夫



元文三年七月十日任

總直

九人

文政三年三月八日任

道吉

按察使

元文三年七月廿一日任

俊宗

八人

文化三年十二月十九日任

俊資

藏人頭

元祿五年十二月廿八日補

尹隆

八十六人

文政四年三月廿七日補

基茂

藏人

元祿六年二月十五日補

輝光

六十三人  
(第壹號)

文政三年八月廿九日補

隆光

使別當

延享二年八月廿九日補

光綱

二十四人

文化十二年二月廿六日補

隆維

中宮大夫

寬政六年三月七日兼

實祖

三人

又政三年十月廿六日轉

經豐

同權大夫

寬政六年三月七日兼

公修

四人

文政三年十月廿六日兼

實滿



同亮

寬政六年三月七日兼

亂定  
六人

文政三年四月廿六日兼

隨明

同權亮

寬政六年三月七日兼

經豐  
三人

文化六年八月七日兼

實緝  
三人

院執吏

明和七年十一月廿四日為

輔平  
三人

寬政三年十二月四日為

治孝

同執權

明和七年十一月廿四日為

前豐  
五人

享和三年十二月廿四日為

胤定  
五人

同廐別當

明和七年十一月廿四日為

公享

文化八年八月十日為

通明  
五人

同別當

明和七年十一月廿四日為

實同

文化五年四月七日為

隆純

神祇伯

永祿十二年十二月廿七日任雅朝

十七人



文政二年五月七日任

雅喬

同大副

貞享四年二月廿四日任

景忠

六人

天明六年六月廿二日任

實忠

陰陽頭

天和二年十二月廿九日任

泰福

八人

文化元年十二月廿三日任

晴親

祭主

寬文元年三月十二日爲

景忠

六人

文化三年八月十一日爲

光忠

(第壹號)

此年中宮大進同權大進同少進同權少進院判官代等雖有記載令省略之了

一歷代官職要略

写

三冊

撰者知水子

此書ハ天神七代地神五代より仁孝天皇に至り降誕立太子受禪即位所實母讓位崩而其全諸大祀ヲ録し不踐祚之天皇六帝同太上天皇七皇親王ハ天智天皇而子履原親王より百



四十五親王内親王ハ自井上聖武帝百七十四  
女王女院號ハ自東三條院百三门院也攝関深  
殿良房公より鷹司政熙公に至り九十八公太  
政大臣ハ大友皇子より及徳川秀忠左大臣ハ  
自多治比島至冬熙公六十六公右大臣ハ自蘇  
我石川鷹至後大忠院賞季公八十五公内大臣  
ハ自鎌足公至後一林院實種公九十五公准大  
臣ハ自伊周公至後陽照院宗長公七十九公贈官  
次第混乱不比尋より櫛笥隆胤公迄八十二公  
但大臣以上也夫より藤原氏五攝家を始め庶

(第壹説)

流に到りてまた次に源家平氏清家丹家に及ぶ  
またの公家衆其祖先より天保年間まで之歴  
代補任を記し附録にハ断絶諸家三十六家之  
系譜より其官職補任之年月日薨卒之年齡ま  
て詳らかに挙げたり  
一 任官勘考  
写  
二 冊  
此編ハ各家之祖先より天保之末年に至りて  
任官并に辞退之年月より其齡を委實記し其次



神祇官

白川藤原吉田

攝関

五攝家分派之御より

大政大臣

五家久我三條西園寺徳大寺花

山院今出川大炊所門

左大臣

前大同一年醍醐日野勝光四条魚

右大臣

各庭田

同外中院

通筋三條西公條松木

庭田舟橋夏野吉田清丸土御門宗忠

内大臣

同醍醐の次十五家

准大臣

前同中山松木園中院外七家

大納言

天正五年任實枝卿後他人不任

之

權中納言

五攝家而已

權大納言

七十九家

中納言

三十家天正五年任基孝卿後他

人不任之

權中納言

百六家

參議

百九家

少納言

十三家

散位卿相兼兼官不載之少納言兼官載之



侍從

百十八家

八省卿

七十五家

左大聽等大夫

五十九家

右勘解由長官

二十八家

造寺長官

十六家

內別當坊別當內膳

十五家

別當藏人頭

四十六家

太宰權帥

二十二家

左大將

十五家

右中少將

八十三家

(第壹號)

四府督

使別當延享元年八月廿九日而再興

同佐

換別當延享元年八月廿九日而再興

一管儒侍讀臣之年譜

写

一冊

此書ハ菅原氏歷代御侍讀兼職を明細にす

義和二年七月正四位下左京大夫清公朝臣仁

明天皇奉授後漢書以來永祿三年二月十五日

正二位權中納言長雅卿後柏原天皇奉授五帝

本紀迄歷世四十六代之年譜以二卷末に立

古書保存會



坊學士是善卿より在成朝臣に至り十四世と  
沿殿儒にハ右大辨輔正卿資忠宣義長貞淳高  
等之浴殿を記す蓋し近來此浴殿之事無之此  
書菅氏歴代の補任殊に詳らかなり  
一貫首補任 写 六冊

撰者知らず

此篇ハ歌藏人ノ補任ニシテ嵯峨天皇弘仁元  
年ヨリ起リ後水尾天皇寛永十九年十一月十

(第壹號)

五日日野弘資後三位ニ任スル近年序ヲ以テ

歴記ス

奥書

宝曆六年仲冬

大理頼言 判



